



AI時代の学校教育も不易流行のスピリッツ



第65回

神戸山手女子中学校高等学校

校長

平井 正朗

Profile

平井 正朗 (HIRAI MASAOKI)

神戸山手女子中学校高等学校 校長

濱名山学院 理事、関西国際大学 客員教授、大阪市教育委員 [教育長職務代理者]

全国芸術高等学校校長会 理事、兵庫県私立学連合会英語研究部会長

2021年度より同校校長。学校事情に詳しく、大学では「学校経営論」他、教職科目の教鞭を執る。著書に「平井校長の英語の仕組み探究講座」他多数。

生成AIはインターネット上の膨大な情報を学習し、3億人分の雇用を自動化できるとの予測がある。その知識量は人が一生かけても学べないレベルであるが、データは経験に基づいた知識や感覚に対応しているわけではなく、確率が高い単語を並べているにすぎない。AIに依存しすぎると思考力が低下し、情報に振り回されて精神面の不調を起すなどのリスクも指摘されている。

学校現場では、AIへの理解を深めることを前提とした上で、適切な使い方と併せて、より速く、よく学習することをファシリテートする指導力が不可欠。ハーバード大学のように、AIを講師として採用、基本的な問いはAIが担当し、学生と教員は深い思考を要する問題に集中するなどの事例も見られる。

確かに、生成AIがあれば苦勞して問題を解くことはなくなるが、物事を深く理解できるようになるかどうかは別問題。例えば、誰も取り残されてはならない教育を推進しているIT先進国のエストニアは、国際学力テストでも上位に位置しているが、コロナ禍以前からデジタル活用能力と併せてAIの偏りや誤りに対応できる分析力や批判的思考力を養うことを重視している。AIはあくまでも教員のサポーターに過ぎないとして、いるところはどこも共通である。

教室に同じ年齢の児童や生徒を集め、画一的な内容の事柄を教える現代の学校のやり方が広まったのは18世紀の産業革命から。技術革新が経済成長を左右するデジタル社会が到来し、メタバース(仮想空間)を使った遠隔学習などが進められている今、大量生産による工業化と近代化を進める際にベストを考えられた手法では通用しなくなるのは自明である。黒板とチョーク、紙のノートが中心だった教室の風景も電子黒板や学習用端末の利用が日常になったのは周知の通りである。

人間を超えるAIを正しく制御できるのかという疑問が生まれる。ハーバード大学のマイケル・サンデル教授は、本当の問題は、AIによって現実と仮想の区別を失うかどうかだと述べている。思考、判断、表現することが人間だけのものではなくなる可能性のある未来には、否応なしに、技術そのものが倫理的であることが必須条件。

予測不可能なVUCA(ブーカ)の時代、教育をとりまく環境は形を変えていくが、テクノロジーが人類の文明を牽引する世代において、人類と地球の命運を握るのは人類の知性と理性であることは否定できない。不易流行の姿勢は学校も同様なのである。

2050年代半ばには、人口が1億人を切る時代がくる。日本は成熟社会になると見られているが、物質的な充足感から精神的な豊かさを求めるなど、多様な価値観とともに変容していく。その意味では、AIやロボットを活用した省人化の取り組みと人しかできない仕事の役割分担が焦点化されることになる。当然、